



ちょっとそこまで ~お散歩日和 (植物編)~



クロガネモチ



光が丘図書館によく行く者にとって、南側の庭先に立つ、赤い実をびっしりたわわに実らせた高木は少々気になる存在ではないでしょうか。遠目にもとてもよく目立ちます。クロガネモチです。

モチノキの仲間でありながら、葉が乾くと黒褐色に変色することから名付けられたとも、小枝や葉柄が黒っぽいからだとも言われています。しかし、好んで庭木として植えられるのは、そのネーミングから来る縁起の良さでしょう。名前の中に「金持ち」を含み、その上「苦勞がねえ(ない)」と重なっています。苦勞知らずの金持ちか、苦勞して金持ちになったかは別として、いずれも庶民の憧れそのものではないですか。



モチノキの名前の由来は、樹皮から烏糝(トリモチ)が採れるからですが、このクロガネモチもやはり樹

液からトリモチを作ることが可能です。しかし、最大の特徴は、花や実の彩りが少ない冬に色を添える貴重な木であることでしょう。しかも、同時期に同じような赤い実をつける他の木と比べても大きく6mmほどあり、数も圧倒的に豊富です。毒はないようですが、実際に口にしてみると、とても苦くて食べられたものではありませんでした。お勧めしません。本を読むと、ムクドリなどの野鳥がよく食べると書かれていますが、それにしても、10月頃に実ってから半年近く経つ、こんな冬場でも多くの実が残っている様子を目の当たりにすると、ピラカンサ同様に、それほど好まれているようには思えません。いよいよ食べるものに不足してという事態にでもなれば仕方なくという程度のことだと推察します。ただこの実の実生率は比較的高く、あちこちで幼木を目にします。実を食べた小鳥が遠くでフンをすることによって、フンに混ざった種が発芽し、遠くまで繁殖範囲を広げているのは事実です。もちろん、木の下にそのまま落下した種子からも多く発芽していますので、自分の家に植栽したいという人は是非どうぞ。

ちなみに、幼木の葉にはヒイラギにも似たトゲが見られるのも大きな特徴です。

俳句の季語に「春落葉」があります。常緑樹が新芽の出る春に古い葉を落とすことですが、この木も春に一斉に古い葉が落ちて驚かされます。

それから、雌雄異株ですので、雄花と雌花とは別々の木に咲きます。



さて、当団地にもクロガネモチが1本立っています。5号棟の北西側の電気室の上辺りです。モクレンとともに並んで立っていますが、あまりにも剪定し過ぎて悲しい姿を晒しています。ここまで丸裸にする理由が分かりません。よく見るとわずかに赤い実が残っています。非常に虐げられている木と言えるでしょう。

